

岐阜城の空間認知 ～文献・絵図・考古資料を用いて～

内堀信雄（岐阜市教育委員会社会教育課）

1 本稿の目的

現在岐阜市教育委員会では岐阜城跡と山麓織田信長居館跡の国史跡指定を目指して、発掘調査や分布調査、絵図、文献の調査等を進めている。小稿は、筆者が担当している岐阜城跡に係る原稿を再編集したものである。その目的は文献史料、絵図資料、分布調査に基づく遺構図により、過去及び現在における岐阜城の所在する空間の認知の実体を明らかにすることである。なお、岐阜城本城の存在した範囲については、本稿の絵図で検討する内容に加えて、近代初頭に描かれた「金華山の図」⁽¹⁾や『岐阜市史』（1928）の記述からみて「金華山」と呼称する。

2 岐阜城の歴史

岐阜城（稲葉山城）は建仁年間（1201～1204）に鎌倉幕府執事の二階堂山城守行政によって築かれたと伝えられるが、詳しいことはわからない。古代・中世を通じて因幡（稲葉）山は城郭というよりも、伊奈波神社の所在する宗教的な場として記録されている。『梅花無尽蔵』では明応5年（1496）には伊奈波神社が衰退した様が記されている。勝俣鎮夫氏は永正6年（1509）頃とされる土岐氏の福光築城と連動して斎藤利隆によって稲葉山城が築かれたと推定する（勝俣1980）。三宅唯美氏は大永5年（1525）の乱における「長井一類」の最後の拠点が稲葉山城であったことから「少なくともこれ以前から長井氏の影響下にあり、道三の父新左衛門尉がその台頭に合わせて自身の拠点とし、道三に引き継いだ」とし、本格的な城郭建設については、斎藤道三の台頭と連動し、天文4年（1535）には「道三が根拠地としていた徴証がある」とする（三宅2006）。

近世の伝承ではあるが、『中嶋両以記文』（延宝3年・1675）では、斎藤道三が伊奈波神社を岐阜公園北の丸山から現在地に移転させ、井口城下町建設を行ったとする。『伊奈波神社略誌』（1941）では、神社移転の年を天文8年（1539）としている。正確な年代は不明で

あるが、斎藤道三による城下町建設もこの頃に始まったのだろう。その後、道三は子の義龍に討たれ、孫の龍興の代に尾張の織田信長の侵攻を受け、永禄10年（1567）稲葉山城は落城した。織田信長は小牧から岐阜に本拠を移した。岐阜の名称はこの時期から広く用いられる。

永禄12年（1569）、岐阜を訪れたポルトガルの宣教師ルイス・フロイスは著書『日本史』に岐阜の城下町や信長の居館、岐阜城の様子を克明に描写している。信長の後、子の信忠、信孝、池田元助、池田輝政、豊臣秀勝が岐阜城主となり、慶長5年（1600）、信長の孫織田秀信が城主の時、関ヶ原合戦の前哨戦で落城し、廃城となった。

江戸時代になると、金華山は岐阜町などとともに当初幕府直轄地、元和5年（1619）以降尾張藩領となった。領主の御山として一般の立ち入りは禁止され、山廻り同心が置かれたほか、達目洞を開墾した臼井岩入が山守を勤めていた。歴代尾張藩主岐阜御成の際には鶴飼見物とともに御山登山・鹿狩りなどが催された。

入山禁止が解けた明治以降になると、明治43年（1910）には山上に復興天守が作られたが昭和18年失火により焼失した。昭和30年に山麓千畳敷下と山頂を結ぶロープウェーが完成、翌年には鉄筋コンクリート造の天守が造られ、現在に至っている。

3 岐阜城研究史

山上部を主とする岐阜城の調査・研究は昭和11年、「岐阜県史蹟名勝天然記念物調査報告書」中の渡辺佐太郎氏による岐阜城の調査報告に始まる（渡辺1936）。翌、昭和12年には村瀬茂七氏が『稲葉山城史』を刊行した。現地踏査を行い、文字による記録と詳細な測量図を掲載する本格的な調査であり、戦後の観光施設による改変前の状況を伺うことができる（村瀬1937）。また、公刊されなかったが本邦築城史編纂委員会の手により岐阜城山上部、砦跡、山麓居館の測量図が作成された（本邦築城史編纂委員会）。

戦後は村瀬氏旧著の再刊（村瀬1973）、『日本城郭体系』中での記述（横山1979）などがあったが、現地の遺構・遺物に即した本格的な調査は昭和60年代から平成にかけて進展した。昭和59年には岐阜城山麓で千畳敷遺跡（信長居館跡）の発掘調査が始まった。同年、北垣聰一郎氏は、岐阜城山頂部の石垣を現地調査

し、「天守台とその北方尾根、天守台から上台所への道の両脇、上台所の下方部、二ノ丸門址とその周辺部、上げ格子門、松田砦の一部」に石垣が残っており、天守台石垣は天正年間の遺構と推定した（北垣 1984）。昭和 60 年、岐阜市歴史博物館が開館するが、山頂部の遺構については地形測量図に基づく立体模型を作成し、展示公開した。地元で城郭研究を精力的に進めてきた林春樹氏は昭和 62 年の『中世城郭事典 2』中で岐阜城の縄張り図を公開した（林 1987）。山上と山麓のみならず金華山や南の瑞龍寺山・上加納山一帯に遺構が展開するというものであった。昭和 63 年、岐阜市歴史博物館は市制 100 年記念特別展『信長一岐阜城とその時代』を開催し、信長居館跡の発掘成果を紹介するとともに岐阜城跡採集遺物や千疊敷遺跡出土品を展示した（岐阜市歴史博物館 1988）。

平成元年、土山公仁氏は岐阜城採集瓦及び千疊敷出土瓦等を分類するとともに、岐阜城の歴史を 4 時期に区分し、各期の瓦がどの時期に相当するかを検討した（土山 1989）。同年、宮上茂隆氏は建築史の立場からルイス・フロイスの記述等を参考にして岐阜城にあった山麓の「四階御殿」の復元設計図を示し、「天主」という名称は、この岐阜城庭園内の信長御殿内に与えられた佳名（題字名）にはじまると考えられる」とした（宮上 1989）。

平成 2 年、千疊敷遺跡 1 次調査の報告書が刊行されるが（岐阜市教育委員会 1990）、この年には報告書掲載の論考をはじめ、多くの研究成果が公にされた。横山住雄氏は『岐阜城』の中で山頂部の現況遺構に関して概説を行うとともに、山麓の居館跡や総構・城下町にも言及している。さらに自身の手による本丸実測図を掲示し、天守閣北西面に「付櫓（出張倉庫）」が付属していると指摘した。土山公仁氏は前年論考に続き「信長系城郭」の瓦を検討し、「信長が岐阜在城時に多用した瓦工集団」が天正 3 年に嫡子信忠に譲られたと想定した（土山 1990 a）。土山氏は別稿において山頂主郭部略測図を提示し、岐阜城攻略ルートと主な岐阜城攻略戦について検討した（土山 1990 c）。北垣聰一郎氏は、千疊敷遺跡で見つかった大型の石垣及び巨石列を検討し、前者を「天文年間から天正年間初頭にかけてのある時期」の遺構だと推定した。巨石列については、「当時流行した「作庭」に必要な「石組み技法」によって、完成させた事例」であり、その時期は天正

年間以前と推定した（北垣 1990）。村田修三氏は全国の城郭縄張り研究を推進してきた立場から、岐阜城の城郭遺構を検討した。「無傷（後世の開発の手が入っていない）で跡が残っているのは」「伝馬屋付近・松田尾塁、本丸や伝台所の西北下の段築部分、東北尾根の遺構群」で、林氏が報告した「砦」については、「平場は認められるが、後世の改変によって明瞭な城郭遺構は確認困難である」とした（村田 1990）。同年、池田誠氏により山上部と山麓居館の縄張り図が発表された。池田氏はこれまで知られていなかった畝状空堀群をはじめで紹介するとともに、山麓の遺構について「金華山山頂曲輪群の大手口」として築かれ、天正 13 年池田輝政が築城したものであると推定した（池田 1990）。

平成 3 年には、岐阜市歴史博物館で特別展『信長・秀吉の城と都市』が開催され、山上採集遺物と山麓発掘出土品が展示された（岐阜市歴史博物館 1991）。同展の図録中では宮上茂隆氏が千疊敷発掘調査で出土した遺構とフロイスの記述との対比を試みた。山麓の「四階建ての御殿」に加えて山上の城塞については、「天守」と呼ぶ建物があつた岐阜城の最奥にあつた」と推定した（宮上 1991 a）。平成 4 年には、林春樹氏は『図説・美濃の城』中で、昭和 62 年に報告した山上の城郭遺構の縄張りをさらに詳細に報告した（林・加納 1992）。平成 6 年には高田徹氏が名古屋市蓬左文庫所蔵の「岐阜古城之図」を含む美濃国内の古城図について縄張り調査の視点から検討を加えた。

平成 9 年、土山公仁氏は、ルイス・フロイスや山科言継の記録、発掘調査、氏自身の岐阜城跡出土瓦研究、宮上茂隆氏の研究等を総合し、岐阜城の概説を行った（土山 1997）。同書には宮上氏による織田信長居館復元図も掲載された。同年、筆者は岐阜城跡及び山麓千疊敷遺跡出土の城郭石垣の分類・編年を試み、信長段階に「外来系石垣（高石垣）」が導入されたと推定した（拙稿 1997）。平成 13 年、「台所郭」直下の「軍用井戸」観光施設整備に伴い、井戸に至る通路の試掘調査が行われた（岐阜市教育委員会 2002）。

平成 15 年、岐阜県教育委員会が実施した中世城館跡総合調査報告の中で中井均氏はフロイスの記述から「山麓部の「宮殿」（儀礼空間）と山頂部の「主城」（防御空間＋私的居住空間）」という形態をとるとともに、山上部の城郭遺構等の縄張り図を提示し、「自然

地形を防御施設としてフルに活用した結果が岐阜城の構造」であり「金華山そのものこそが要害であった」と評価した（中井 2003 b）。小島道裕氏は同報告書中で山麓居館について報告している（小島 2003）。同年、高田徹氏は岐阜城山上部、山麓部、砦部の縄張り図を提示した。高田氏は村田氏や中井氏が存在に否定的であった「砦」について、一部は城郭遺構であると判断している。山上部については「フロイスの記述等も勘案すれば、城主の居住空間とそれを守備する防御施設の集合体的な面が強かった」と想定した。遺構の年代については「山上・山麓に現在見られる遺構は、その最終段階に完成したのではないかと考え、その可能性として豊臣秀勝・織田秀信期」を想定した（高田 2003）。

平成 16 年、高木洋氏はアルカラ版によるルイス・フロイスの 1569 年 7 月 12 日付書簡を抄訳し、山上の城についても推論を加え「居室を中に含んだ建物」があり、私的な施設としての側面を指摘した（高木 2004）。平成 17 年に岐阜市歴史博物館はリニューアルオープンしたが、これまでの岐阜城現況遺構立体模型に代えて、「天下鳥瞰絵巻」と称する信長時代を想定した模型と映像を用いたジオラマ展示を行っている。山頂部については宮上氏の研究成果を踏まえ、「稲葉城趾之図」「御三階之図」「濃州厚見郡岐阜図」などを参考にして復元した。同年、高木洋氏はアルカラ版によるルイス・フロイスの 1569 年 7 月 12 日付書簡を全訳した（高木 2005）。平成 18 年、小島道裕氏は『信長とは何か』の中で、「山麓の館は、基本的に外に開かれたハレの場」であり、そこには「表」の広間と「奥」に相当する茶室の使い分けがあったとした。それに対して「山上の城は、基本的に城主が生活する「ケ（藪）」の場」であるが、「特別な接客をする「奥・ハレ」の場」でもあると推定した。さらに岐阜城では「室町幕府の館の様式を受け継ぎながら、次第に安土城のまったく新しい様式へと踏み出していく様子」を見て取ることができると指摘した（小島 2008）。

以上、岐阜城の調査・研究を概観してきた。まず、戦前に村瀬氏により詳細な図面が作成されていたことは特筆される。戦後再刊されたにもかかわらず村瀬氏の業績はこれまでほとんど受け継がれてこなかったように思われる。昭和 60 年代に至り、縄張り図作成による城郭研究の手法が岐阜城にも用いられ、大きな進展

があった。山上遺構については林氏、村田氏、池田氏、中井氏、高田氏などにより縄張り図が作成されてきた。最も新しい成果である中井氏と高田氏の山上主要部縄張り図は良く似ており、縄張り研究による現地表観察の到達点を示す。山上部は、現況遺構の観察から自然地形主体の防御空間であり、フロイス等の記述から居住空間が存在したとする見解が村田氏、中井氏、高田氏に共通する。山上主要部以外の城郭遺構については、多数の存在を認めるもの（林氏）、一部認めるもの（高田氏）、認めないもの（村田氏、中井氏）など様々である。縄張り研究以外では考古学研究として瓦、石垣など特定の遺構・遺物を扱ったものがいくつかあるが、総合的な研究は見られない。

山上部の研究は現地表観察に基づく縄張り研究が進展し、ある程度共通の見解が得られている段階である。今後は、これまでの成果を踏まえて、測量図作成、現況遺構の悉皆的な調査、遺構・遺物の総合的な検討等を行うとともに、文献史料、近世絵図、近世地誌類等を総合的に検討して岐阜城の全体像を明らかにする必要がある。

4 文献史料の検討

文献史料を用いて岐阜城が機能していた時期、岐阜城の所在する空間（金華山）がどのように認知されていたかを検討する。管見の限り岐阜城自体の維持管理・警護に関する文献史料は見られないが、金華山に南接する「外山」に対しては、領主権力が寺と村双方に特権を保証しているため、その関連文書を検討した（2）。

（1）瑞龍寺宛禁制

【史料 1】織田信長禁制（瑞龍寺文書、『岐阜県史 史料編 古代・中世一』）※傍線筆者

「禁制 瑞龍寺

一当寺門前伐採竹木・放飼牛馬之事

一寺家并門前諸役・取陣・借宿事

一祠堂方、先規相定年貢諸役之外、臨時之課役之事

一外山蒞取事、雖一切停止、衆僧之儀、如前々、受用得其意事

一背寺家之法度輩、檀家許容之事

右條々、於違背之輩者、速可処厳科者也、仍下知如件、永禄十一年八月 日（織田）信長 朱印」

【史料2】織田秀信禁制（瑞龍寺文書、『岐阜県史 史料編 古代・中世一』）※傍線筆者

「定 瑞龍寺

一当寺并門前伐採竹木・放飼牛馬儀、一切停止之事

一寺中同門前諸役・門竝令免許之事

一外山如前々、受用不可有相違之事

右條々、任先規之旨、申付之状如件、

文禄二年十月 日 （織田）秀信（花押）」

史料1・2は、瑞龍寺にあてた禁制で、「外山」の伐採は一切禁止するが、瑞龍寺については前例のとおりに刈り取ってよいというものである。

（2）上加納村の外山

【史料3】羽柴秀吉判物写（棚橋家文書、『岐阜市史 史料編 近世一』）※傍線筆者

「其村境のしひら東角限、北は峯限、西は大堀限入可申候、如前々、山年貢免許者也

天正十〇年十一月 日 筑前守 御在判

加納村」

【史料4】滝川益成書状写（棚橋家文書、『岐阜県史 史料編 古代・中世一』）※傍線筆者

（包紙ウハ書）「慶長四年 滝川周善様御添状」

「如前々、外山御番、町口御固之儀ニ付、御判形相下遣し申候条、得其意、無油断馳走尤候、恐々謹言

（慶長四年）閏三月十五日 □□（益成力）（花押影）

棚橋九郎右衛門殿」

史料3は、上加納村に対し、「のしひら」「峯」「大堀」を境界とする範囲の山年貢を免除したもの。「上加納村絵図」や仁木宏氏の指摘（仁木2009）を参考にすると、この境界は「のしひら」から北へ延び、「取手」「中取手」「檜原取手」「峯本宮」を結ぶ稜線上とその西端の「惣構」に至るラインに相当するものと考えられる（図1）。史料8は、滝川益成が棚橋九郎右衛門に対して「外山」の番と「町口」の警護を命じたもの。棚橋氏は上加納村の有力な頭百姓で、庄屋を勤めていた。史料4に記される「外山」は史料3のエリアと考えられる。史料4に「如前々」とあるから関ヶ原合戦直前に命ぜられたものでなく、普段から「外山」にある岐阜城防衛施設の維持管理と警護が命じられていて、山年貢免除はその見返りと推定できる（三宅唯美氏教示）。また、こうした関係は、史料は残されていないが、

上加納村以外にも金華山に隣接する岩戸村、日野村についてもあった可能性が高い（三宅唯美氏教示）。

（3）まとめ

1）金華山は領主の直接支配する城の範囲と推定されるが、直接証明する史料は見出せない。

2）岐阜城の機能していた時期、城域（金華山）の外周に位置する「外山」に対しては上加納村と瑞龍寺の双方に重層的な権益が認められていた。

3）2）の内、上加納村の権益は、「外山」にあった岐阜城防衛施設の日常的な維持管理と警護に対する見返りであったと思われる。

5 絵図資料の検討

近世に岐阜城の存在した山（金華山）を描いた絵図を用いて、金華山が近世においてどのように認知されていたかを検討する。

（1）絵図類の分類

金華山を描いた近世絵図には、合戦図や復元図^{（3）}を除くと表1・図2のようなものがある。これらは何らかの意図をもって金華山や岐阜町などを把握しようとしたものと考えられる。描かれた範囲や表現方法などから5類に分けることができる。絵図のいくつかには描かれた年代が記載されているものがあり、寺社の消長などを加味するとおおよそA類が古く、D類が新しい傾向がある。C類はA類、D類の中間的な時期であろうか。D類に含まれる絵図は、描写内容（寺社の消長など）から相対的な前後関係のある程度推定できる。

A類…岐阜町と岐阜町及び長良川から見た金華山を描くもの。この内、承応2年（1654）の年記を持つ2枚については、岐阜町部分に街区の距離等が記載される。

B類…岐阜城山上主要部の城郭遺構とデフォルメされた金華山、長良川、岐阜町を描くもの。1枚のみ。

C類…金華山のみを描くもの。山の上に点在する城郭遺構の平面形と寸法を記載する。「稲葉城趾之図」の題名が示すとおり岐阜城跡と絵図制作者が認知した範囲を描いていると思われる。1枚のみ。

D類…金華山と周辺の日々及び様式化された岐阜町、長良川などを描くもの。種類が多い。

E類…加納藩領を描く絵図に隣接地として岐阜町、長良川とともに描くもの。

分類	通番	金華山	岐阜町	周辺	題名	所蔵機関	備考
A	1	町・川側	○	×	濃州厚見郡岐阜古城之図	蓬左文庫	承応3年(1654)
	2	町・川側	○	×	濃州厚見郡岐阜古城之図	岩瀬文庫	承応3年(1654)
	3	町・川側	○	○	岐阜御山并惣山 今泉沖早田沖絵図	徳川林政史研究所	元文元年(1736) 中秋
B	4	町・川側	○	×	濃州厚見郡岐阜古城之図	蓬左文庫	
C	5	全域	×	×	稲葉城趾之図	伊奈波神社	17世紀後半～18世紀前半
D	6	全域	○	△	岐阜総絵図	徳川林政史研究所	
	7	全域	○	△	岐阜町絵図	蓬左文庫	
	8	全域	○	△	岐阜町絵図	岩瀬文庫	
	9	全域	○	△	岐阜町絵図	徳川美術館	寛政6年(1794)
	10	全域	○	△	岐阜町絵図	岐阜市博	9の写し
E	11	全域	△	○	加納領明細絵図	個人	承応2年(1653)
	12	全域	△	○	美濃国加納領絵図	岐阜市博	承応2年(1653) 絵図の天保15年(1844)の写し

表1 金華山絵図一覧

(2) 金華山の領域について

A・C・D類の絵図に描かれる金華山の範囲を都市計画図に落としたのが図3である。これを見ると、C類は現在の国有林が大半で、それに岐阜公園(山の部分)と伊奈波神社及びその周辺の山が加わった範囲が描かれる。A類はほぼ総構で囲まれた城下町と町及び長良川から眺めた金華山の稜線部分までが描かれる。D類は町と金華山及びその周辺の山々が描かれるが、C類と同じ範囲だけは別の色で描かれ、ここが金華山(岐阜城跡)の領域であることが示されている。なお、D類の内新しいと思われる9・10番では伊奈波神社周辺が別の色で描かれており、近世後期に至り、金華山の領域から伊奈波神社の領域がある程度分離して認識されるようになったらしい。

E類は金華山東側の領域が曖昧に描かれているが、C類の領域を描いていると認められ、更に稜線で分離して西～北側の領域を「城山」、東～南側を「岐阜山」と呼称している。

(3) C類絵図「稲葉城趾之図」について

「稲葉城趾之図」は伊奈波神社に伝来する金華山を描いた絵図である(図4)。絵図の構成要素は自然景観(山、岩、樹木、川、滝等)、道、城跡の遺構、伊奈波神社関連施設と付近の社叢や施設、山守臼井家関係の建物、神社、入定窟等に整理できる。城跡遺構は山上主要部や水ノ手道、七曲道、南接する加納藩領との境

界尾根線上などを中心に遺構の形状、寸法、石垣の描写などが見られる。

描写の中心が自然地形とその中に分布する城跡遺構であることから、自然地形も含めた城跡の現状の把握が作成の主たる目的であったと思われる。さらに、伊奈波神社とその関連景観が大きく描写されることから、城跡の構成要素をなす伊奈波神社の現在の姿を強調していることがわかるとともに、絵図作成に伊奈波神社が関与していた可能性も伺える。絵図の東方達目洞には山守臼井家関係の景観が描かれており、尾張藩によって守られている金華山の現在の姿を示していると考えられる。このように見てくると「稲葉城趾之図」は単なる現状把握のためだけの図ではなく、稲葉山城(岐阜城)の時代の姿に現在の尾張藩領となって保護されている姿を重ねさせた歴史的な空間としての金華山を描写したものであると理解することができる⁽⁴⁾。

(4) 結論

1) C～E類に描かれる金華山の範囲からみて、近世を通じて金華山は城域として認知されていた。

2) 金華山全体が城域として認知されていることからみて、当時は遺構だけでなく、遺構と自然地形を一体のものとして城域とらえていたと推定できる。

3) A・B・D・E類絵図などからみて、広い意味での城域は、金華山だけではなく、総構で囲まれた城下町も包括するものであったと見ることができる。

4) 金華山の領域の中にもA類やE類のように長良川側及び岐阜町側を分けて描くものがあり、この範囲が狭い意味での城域と認知されていた可能性がある。

6 分布調査に基づく遺構図の検討

金華山全域及びその周辺の山々を踏査し、現時点での遺構の分布状況を明らかにすることを目的として踏査による分布調査を行った。ただし、時間的、体制的制約から全てを踏査できたわけではなく、登山道からはずれた斜面、谷等は踏査できなかった。また、遺構の認定も筆者の恣意的な部分が相当にあると思われる。

(1) 方法

登山道や尾根線上を中心に遺構の有無を確認し、地図上に位置等を記載する。遺構認定に際しては以下の基準を設定した。

基準1 石垣等の顕著な遺構が認められる。

基準2 石材等が斜面に散布している。

基準3 円礫・角礫等が見られる。集中している場合と散在している場合がある。

基準4 人工的な地形改変の痕跡が認められる。明瞭なものから不明瞭なものまでいくつかあるが、ある程度経験的に判断した。

基準5 瓦・土器・陶磁器等の遺物の散布が見られる。

(2) 結果

分布調査の結果、金華山及びその周辺の山の尾根線上に多数の遺構が存在することがわかった(図1)。これらは大別すると2つに分かれる。

ア 平坦地に石垣や石材の散布等顕著な遺構が組み合わさったもの。

イ 明瞭あるいは不明瞭な平坦地のみで形成されるもの(基準4のみの遺構)。

イの遺構は広範囲に認められるが、アは山上主要部、水の手道、馬の背道、百曲道、鼻高ハイキングコース、松田尾などに限られる。この範囲は、ほぼ長良川や岐阜町に面した部分である。

研究史の項で述べた村田氏、中井氏等は主に山上主要部を中心としたアの遺構の一部を城郭遺構と認定しているものと思われる(図6)。高田氏もそれに近いが、イの遺構の一部、複数の段々地形が認められる平坦地に関しては城郭遺構と認定している。林氏は広域な城郭遺構を表示するが、林氏作成の縄張り図を見る限り、

今回認定した遺構とは、場所、形状等が異なっている(図5)。

7 まとめ

文献史料、絵図資料、分布調査に基づく遺構図それぞれの空間認知には重なる部分もあるが違いもある。文献史料は、岐阜城の全体空間が、直接支配地+村・寺院を通じた間接支配地の二重構造であった可能性を示唆する。しかし、残された史料は限られており、全体像を明らかにするには制約が大きい。絵図資料は尾張藩が受け継いだ領主の直接支配地「金華山」(遺構だけでなく自然地形も含む)の視覚的な姿を示す。しかし、文献史料のような支配構造は分からず、製作意図により強調や省略が見られる。分布調査に基づく遺構図は、文献史料、絵図資料と異なり、現存する遺構がどこに存在しているかを明らかにできる。しかし、文献史料のような支配構造、絵図資料のような自然景観を含む領域を認識することはできない。

このように性質の異なる各史資料を総合化することには慎重さが求められる。ひとまず各々の長所、短所を踏まえて重層的な空間認知の構造を提示することが必要であろう。本稿で試みた事例を模式的に示すと図7のようになる。

注

【1】 尾張藩から明治政府が受け継いだ金華山の領域を描く絵図。明治初期に製作されたと思われる。

【2】 文献史料の理解については、恵那市教育委員会 三宅唯美氏の御教示によるところが大きい。

【3】 近世に描かれた関ヶ原合戦前哨戦の岐阜城攻防を描いた絵図や岐阜城の往時の想像図が伝わっている。こうした絵図も含めて近世絵図全体を検討すべきであるが、地域を把握しようとして製作された絵図とは目的が明らかに異なるため、今回は検討しなかった。

【注4】 さらに検討が必要であるが、稲葉山城建設以前に金華山全域が伊奈波神社の社地(神域)であったことも暗示している可能性もある。

参考文献

池田誠 1990「織豊系城郭としての岐阜城一発掘調査の理解にふれて一」『中世城郭研究第4号』中世城郭研究会

内堀信雄 1997「考古資料から見た16世紀代の美濃(2)

一城郭石垣の変遷を中心に一』『美濃の考古学第2号』
美濃の考古学刊行会
遠藤才文・川井啓介・鈴木正貴 1991「尾張国古城絵図考」『愛知県中世城館跡調査報告Ⅰ（尾張地区）』、愛知県教育委員会
勝俣鎮夫 1980「大名領国制の盛衰」『岐阜市史』通史編原始・古代・中世、岐阜市
北垣聰一郎 1984「岐阜城の遺構―石垣を中心に―」『岐阜市歴史博物館建設ニュース7』
北垣聰一郎 1990「千畳敷石垣とその変遷」『千畳敷』、岐阜市教育委員会
岐阜市役所「金華山」『岐阜市史』1928年
岐阜市教育委員会 1990『千畳敷』
岐阜市教育委員会 2002『平成12・13年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』
岐阜市役所 1928「金華山」『岐阜市史』
岐阜市歴史博物館 1988『特別展信長―岐阜城とその時代図録』
岐阜市歴史博物館 1991『特別展信長・秀吉の城と都市図録』
小島道裕 2006『信長とは何か』講談社選書メチエ
続群書類従完成会 1998『言継卿記 第四』
高木洋 2004「フロイスが見た岐阜の館・城・町―アルカラ版・イエズス会士日本書簡集から―」『守護所・戦国城下町を考える 第1分冊』、守護所シンポジウム@岐阜研究会
高木洋 2005「ルイス・フロイスの岐阜来訪―1569年7月12日付書簡（アルカラ版）全訳―」『岐阜市歴史博物館研究紀要 第17号』、岐阜市歴史博物館
高田徹 1994「蓬左文庫所蔵濃州古城之図について」『愛城研報告 創刊号』、愛知中世城郭研究会
高田徹 1995「日本城郭史資料の紹介―戦前における県内城館調査」『岐阜史学90』、岐阜史学会
高田徹 2003「岐阜城について」『中世城郭研究第17号』、中世城郭研究会
土山公仁 1989「岐阜城の瓦について」『研究紀要3』、岐阜市歴史博物館
土山公仁 1990a「信長系城郭における瓦の採用についての予察―同範あるいは同型瓦を中心に―」『研究紀要4』、岐阜市歴史博物館
土山公仁 1990b「信忠時代の岐阜城・清須城―出土瓦を中心にして―」『博物館だより16』、岐阜市歴史博物館

土山公仁 1990c「岐阜城攻略法を探る―難攻不落の国盗りの城―」『作戦研究戦国の攻城戦』別冊歴史読本15-21
土山公仁 1997「天下制覇を意識した岐阜城」『天下布武への道 信長の城と戦略』、成美堂出版
中井均 2003a「岐阜城」『岐阜県中世城館分布調査報告書 第2冊』、岐阜県教育委員会
中井均 2003b「岐阜地区における戦国期山城の形態―岐阜城・大桑城を中心に―」前掲書
中井均 2007「山城に住む女性」『列島の考古学Ⅱ』、渡辺誠先生古希記念論文集刊行会
仁木宏 2009「美濃加納楽市令の再検討」『日本史研究 557』
林春樹 1987「岐阜城」『図説中世城郭事典 第二巻』、新人物往来社
林春樹・加納宏幸 1992「岐阜城」『図説・美濃の城』、郷土出版社
本邦築城史編纂委員会『日本城郭史資料 第15冊 美濃・飛騨国』国立国会図書館蔵
松田毅一・川崎桃太訳 1978『フロイス日本史 五畿内編Ⅱ』、中央公論社
宮上茂隆 1991a「信長の岐阜城・安土城」『特別展信長・秀吉の城と都市』、岐阜市歴史博物館
宮上茂隆 1991b「岐阜城と安土城―信長の「文」と「武」のシンボル」『図説織田信長』、河出書房新社
三宅唯美 2006「戦国期美濃国の守護権力と守護所の変遷」『守護所と戦国城下町』高志書院
村瀬茂七 1937『稲葉山城史』、博文堂書店
村瀬茂七 1973『斎藤道三と稲葉山城史』、雄山閣（昭和12年本の復刊）
村田修三 1990「岐阜城の縄張り」『千畳敷』、岐阜市教育委員会
横山住雄 1990『岐阜城』、美濃文化財研究会
横山泰 1979「岐阜城」『日本城郭体系』、新人物往来社
渡辺佐太郎 1936「岐阜城趾」『史蹟名勝天然紀念物調査報告書第5輯』、岐阜県

(e-mail: utibori-n@city.gifu.gifu.jp)

図1 岐阜城関連遺構分布及び金華山領域重ね図

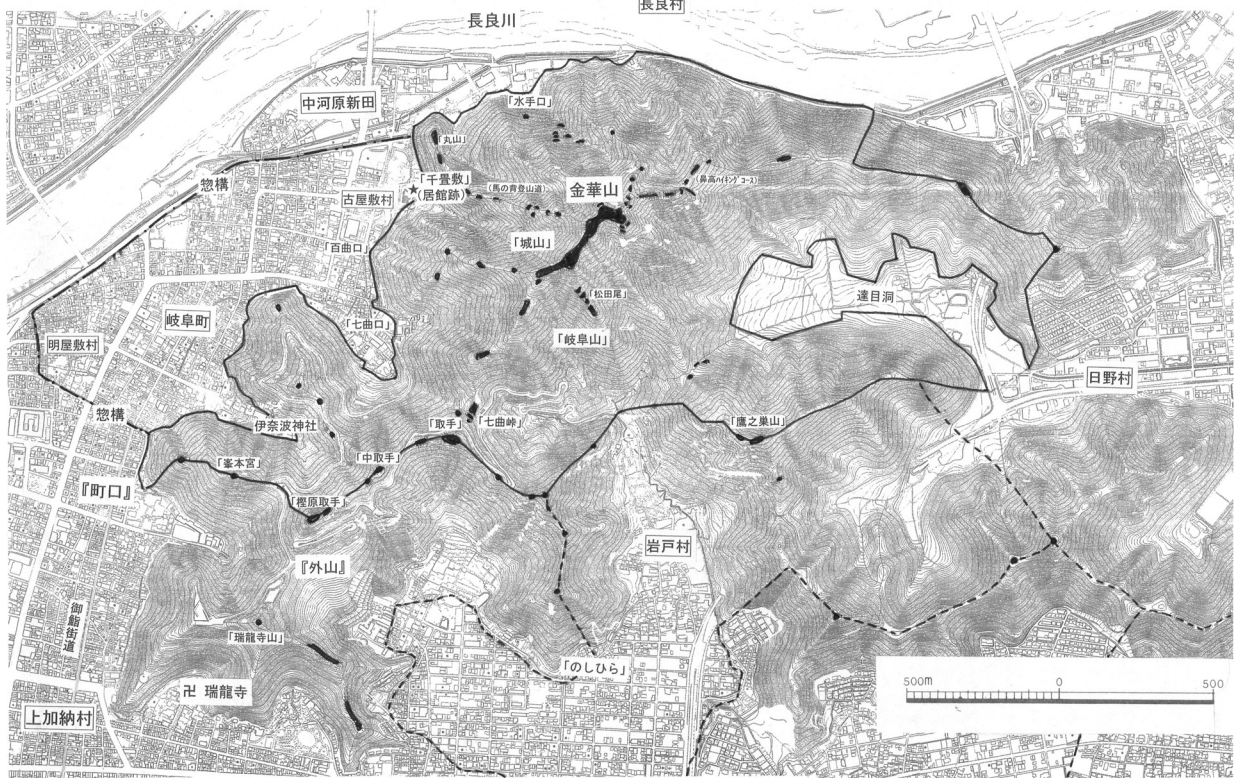
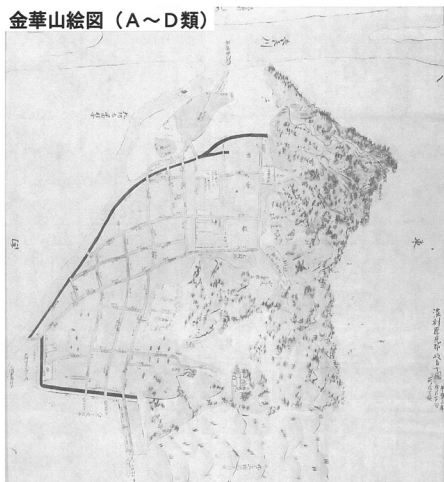
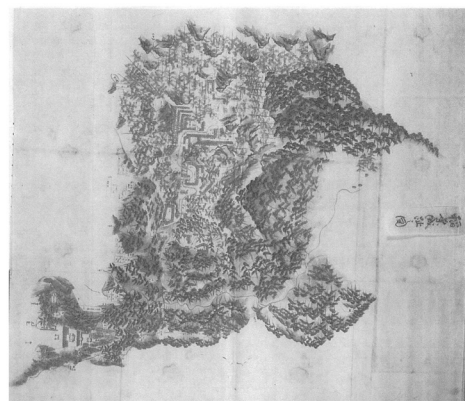


図2 金華山絵図 (A～D類)



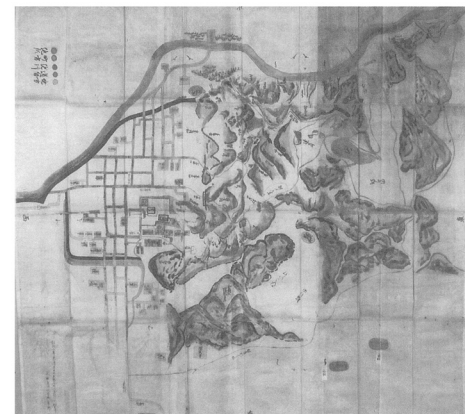
絵図A類 岐阜町絵図 (蓬左文庫所蔵) 表1 通番1



絵図C類 稲葉城址之図 (伊奈波神社 所蔵) 表1 通番5



絵図B類 濃州厚見郡岐阜土城之図 (蓬左文庫所蔵) 表1 通番4



絵図D類 岐阜町絵図 (金澤文庫 所蔵) 表1 通番8

図3 金華山絵図各類の描写範囲

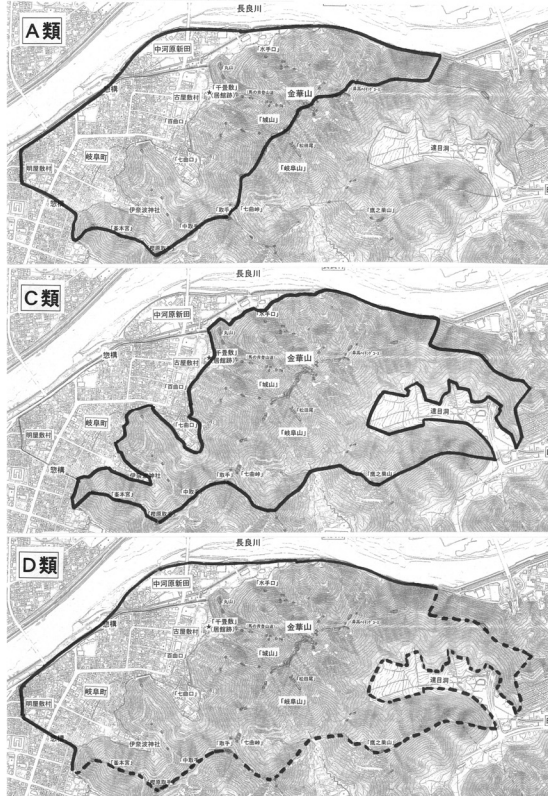
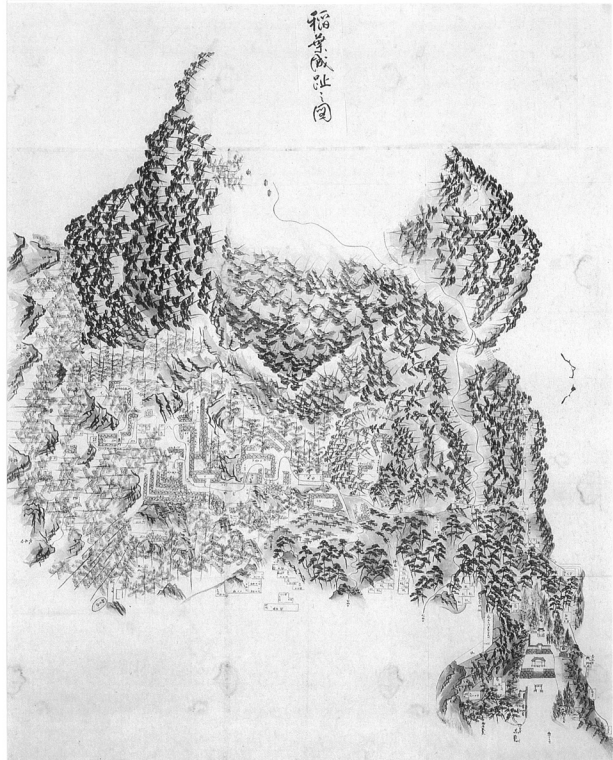
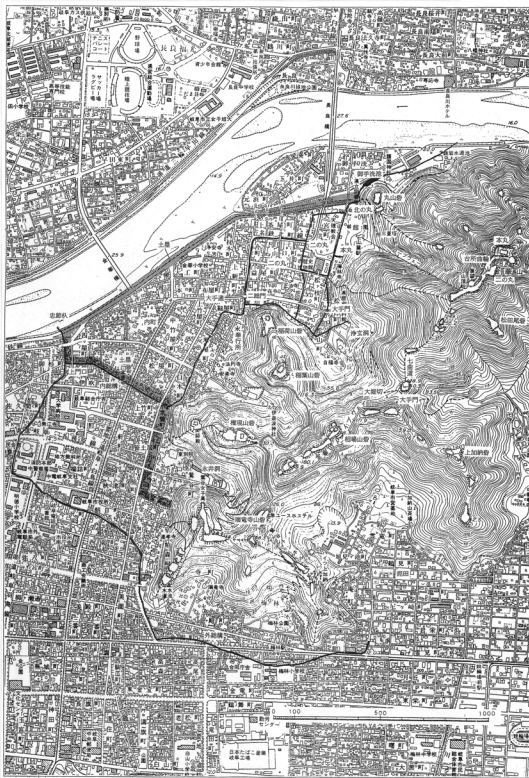


図4 稲葉城趾之図



稲葉城趾之図 (伊奈波神社 所蔵)

図5 岐阜城縄張り図(1) 林春樹氏作成(林 1992)



▲岐阜城縄張り図と城下町図 昭和39年の岐阜市平地図(1:3万)の1/2に縮小。

図6 岐阜城縄張り図(2) 中井均氏作成(中井 2003a)

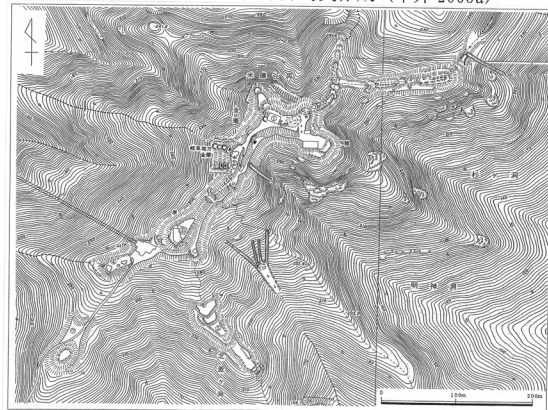


図7 文献・絵図・分布調査遺構重ね合わせ模式図

